

中国甘肅省の民衆歌謡“洮岷花儿”について

とうみんホアール

—東アジアの歌謡文化再考—

板垣俊一

Study and Research on *Taomin Hua'er* in Kansu Province, China
—A Review of East Asian Folk Literature—

Shun'ichi Itagaki

1 はじめに

日本古代の歌垣に類似した行事が、中国南部の少数民族の間に広く行なわれていることは、今日周知の事実となっている。とくに、未婚の男女が歌の掛け合いを通して伴侶を求め合う習俗は、最近まで、中国南部の貴州省・広西チワン族自治区・雲南省、そのほかタイ、ミャンマー、ヴェトナム等の北部地域などの少数民族に見られ、チワン族ではこの習慣が今も生きている。⁽¹⁾近年、照葉樹林文化圏と呼ばれるこの地の歌文化に日本人の研究者の視線が集まっているが、しかし実は日本の古代歌謡との関係が最初に論じられたのは、中国古代の漢民族における民間歌謡との間においてであった。中国南部の少数民族の居住地域における歌の掛け合いの現場でも漢語による歌の掛け合いは見られるが、中心となっているのは漢語以外の少数民族の言語による掛け合いである。この広大な中国に、古代の漢民族にあったような、漢語を中心とする歌垣的な習俗が、今はまったく残っていないのだろうか。そんな疑問を起こさせるほど、漢民族の間に行なわれている歌垣的習俗の調査研究は、日本の学会では等閑に付されてきた。

本論では、漢語による男女恋歌の掛け合い習俗という点からは、具体的な実態がほとんど報告されてこなかった、中国甘肅省南部における「花儿」という歌謡を、若干の考察をまじえて紹介することにしたい。

2 これまでの歌垣研究について

(1) 中国古代歌謡研究と歌垣

中国の古代歌謡『詩経』に収められる「国風」の解釈は、マーセル・グラネーの研究（『支那古代の祭礼と歌謡』内田智雄訳、弘文堂書房、1938、原著：Fetes et chansons anciennes de la Chine / Marcel Granet 1919）によって一変した。今日、『詩経』国風の詩は、その多くが田野で行なわれた祭礼にともなう神事歌謡であるとともに若い男女の掛け合い歌であり、中国古代民衆の恋愛歌であることが明らかになっている。グラネーの前掲書にいう——歌謡が往々山川を全く同時に言及して居るその事実にかんがみて、彼等の会合場所が、河川を俯瞰する丘陵の近く、若しくは小山の側面にある溜り水、或は泉の傍などであつたことは明らかである。⁽²⁾と。つまりそれらの歌謡は、春秋一定の時期に、山の近くあるいは川の近くや原野などの、一定の神聖視された場所に多くの人々が集う雨乞いなどの季節祭で歌われたと考えられている。また、その祭礼は多産を祈る性的な意味合いも持っていて、男女の婚約もしくは結婚の祭礼でもあったという。

そのような男女掛け合い形式の恋愛歌謡が、河南・山東・山西・陝西など、いわゆる中原文化圏と呼ばれる一帯の古代漢民族に広く行なわれていたことは、今日定説となっている。そしてこのような習俗は日本古代（古代ヤマト）の歌垣を思わせるものであり、グラネーは実際に

『詩経』国風解釈の傍証として古代ヤマトの歌垣（かがひ）をあげている。その後、たとえば白川静は、この説を継承しながら多少の修正を加えつつ、古代中国では都城の東門または山や河などの聖地で雨乞いの祭りが行なわれたこと、「舞雩」と呼ばれたその場所で行なわれた祭祀としての歌舞は、のち次第に神事的色彩を薄くして、男女が歌を掛け合って相手を求め合う歌垣となっていったこと、水辺で行なわれた古代ヤマトの歌垣も、やはり雨乞いと関係があったこと、などを述べている。⁽³⁾

かくして、『詩経』国風すなわち中国の古代社会に歌われた民間歌謡の新たな研究から、「歌垣の習俗を介して、詩編とわが国の古代歌謡との間に本質的ともみられる近似性のあること」⁽⁴⁾が明かされ、古代ヤマトの記紀歌謡や万葉集について、とりわけ歌垣の習俗に着目した見直しがなされてきた。たとえば土橋寛著『古代歌謡と儀礼の研究』（岩波書店、1965）などはそうした成果である。

またさらにグラネーが、古代の中国社会において男女の恋愛歌が対唱されたことの傍証にあげたのは、広西（広西チワン族自治区）や南詔（雲南省）など、中国南部および西南部の少数民族の歌謡とその習俗であった。この地方の民族文化について知りうる資料は、長らく中国の地方誌のほかは少数の西洋人の調査記録や宣教師の記録などに限られていたが、日中国交回復、そしてさらにその後の中国政府による改革開放政策によって現地調査が行ないやすくなったことから、日本人による調査も近年たいへん盛んになっている。たとえば、雲南省のペー族を中心とする調査研究として工藤隆・岡部隆志著『中国少数民族歌垣調査全記録1998』（大修館書店、2000）、広西チワン族の調査研究として手塚恵子著『中国広西壮族歌垣調査記録』（大修館書店、2002）、また雲南省西北のモン人の調査研究として遠藤耕太郎著『モン人母系社会の歌世界調査記録』（大修館書店、2003）などを最近の目立った事例としてあげることができるだろう。

こうして、〈歌垣〉をキーワードに、日本の古代歌謡研究は、中国南部および西南部の少数民族の歌謡文化に大きな関心を寄せることにな

ったのである。既述のようにグラネーの研究がこれらをすでに結びつけていたのであるが、中国の少数民族に見られる歌謡文化の調査研究を誘発したもう一つの大きな要因は、なんとと言っても中尾佐助が提唱した照葉樹林文化論であった。

（2）強調されすぎた照葉樹林文化論

はじめに、研究史的な流れに沿わないことを承知で、引用したい文章がある。今からすでに半世紀前、金田純一郎は、男女が野外で掛け合いの恋愛歌を歌う「唱和方式の婚俗」が、チワン族、瑤族、苗族、トン族、モン族、ワ族、ラフ族、リス族、イ族など中国南部および西南部の少数民族に広く見られることを述べながらも、「しかし古代漢民族におけるカバヒの婚俗をそれらとのみ繋ると考へるのは早計に失しよう」と述べた。⁽⁵⁾金田は、ではどうとらえるべきかという点までは述べていないが、『詩経』国風にそのような歌謡を残す古代の中原文化圏に住む漢民族と、中国南部方面に住む現今の少数民族との間には、時間的歴史的な差だけでなく、風土的に大きな差があることを考えれば、このような歌謡習俗は照葉樹林文化圏だけの特徴ではなく、さらに広い地域に存在したことを示唆したものと受けとめることができるだろう。『詩経』国風が収録された河南・山東・山西・陝西などは照葉樹林文化圏ではない。今日、グラネーが古代中国中原の歌謡を考えるために援用した地域の歌謡習俗が、逆にその地域の文化圏の独特の習俗とされ、かえって古代漢民族における同様の習俗が軽視されているように筆者には見受けられる。

ところで、古代ヤマトの歌垣とは「飲食・歌舞・性的解放の三つを具えた行事」であるという。⁽⁶⁾また、「男女の性の交渉は、神迎えの齋場で行われた場合、穀物の稔りをもたす。その齋場は、穀物の結実を目的とした一年の折目々々にある。この穀物への感染が、歌垣の信仰であり」、穀物の稔りを招ぐための神事であるともいわれる。⁽⁷⁾また、「成年に達した男女が山上或は部落の聖地等を集って、飲食・歌舞の後に性の解放を行う習俗」であり、男女が恋歌を掛け合うことが、その行事の最も重要な要素であるともいわれている。⁽⁸⁾そして「歌垣の習俗

は、もともと照葉樹林帯で焼畑農業を営んで生活していた人々の間で行われていた習俗であった⁽⁹⁾というのが、今日の定説的な見方となっている。

以上をもとに、歌垣の習俗にとって最も重要な要素を、聖地での集い（すなわち雨乞いなどの神祭り）、男女の恋歌の掛け合い、そして性の解放と考えれば、このような行事内容はここに紹介する中国西北部の甘肅省で行なわれる「花儿会」にも確実に見ることができるのである。甘肅省南部の黄河の支流洮河流域に広く流行している洮岷花儿は、そのような集いで歌われる歌謡であり、竜神廟などがある聖域に多くの既婚男女が集まって対唱する異性間の恋歌を含んでいる。とりわけ女性にとって、このような行事に参加することは身内の者に隠すべき行為だと思われることから考えれば、実際には肉体的な関係が一切なくとも、それは歌による一種の性の解放と見ていいだろう。これは紛れもなく歌垣であると言えよう。しかし、花儿が歌われている地方は照葉樹林文化圏でもなければ、またかつて焼畑農業が営まれていたところでもなかった。共通点は少数民族の居住地という点だけである。

3 歌謡「花儿」の概要

さて、その「花儿」とは、中国の西北部に広く歌われている民謡の名である。別名、「少年」とも「野曲」とも呼ばれた。『中国大百科全書』音楽・舞蹈編によれば、以前民間では、河湟系統の花儿は「少年」または「野曲」と俗称されていたが、ここ数十年のうちに次第に花儿と総称されるようになったのだという⁽¹⁰⁾。また、この民衆歌謡は中国西北部の山歌⁽¹¹⁾の一種で、歌われている範囲は、およそ賀蘭山の南、六盤山の西、岷県の北、日月山の東、すなわち甘肅、青海、寧夏の三省にわたる広い地域である。この地域は、漢族のほかに、回族、土（トゥー）族、撒拉（サラール）族、東郷（トンシャン）族、保安（ポアン）族、西藏（チベット）族、裕固（ユーク）族など多民族が雑居するところであるが、漢語で歌われるこの花儿は、これら八つの民族間で共通に歌い合うことのできる歌謡である。

また、広範囲に分布するこの歌謡は、地域的

特色によって大きく次の二系統に分けられている。

（1）洮岷花儿と総称される第一系統

これは甘肅省の洮河流域に広く流行している花儿で、さらに次の二つの支系に分かれる。

1. 北路（康楽・臨洮などで歌われる花儿）
2. 南路（岷県一帯で歌われる花儿）

（2）河湟花儿と総称される第二系統

これは広く甘肅、青海、寧夏、つまり一般に黄河・湟水の流域に歌われる花儿である。（「河湟」は黄河と湟水二つの河川を指す。）これも地区と民族の相違に基づいて、さらに次のような四つの支系に分かれる。

1. 青海の互助トゥー族の花儿
2. 循化サラール族の花儿
3. 寧夏の回族の花儿
4. 甘肅臨夏の花儿（これを習慣上さらに四つの細支系に分けている）

このうち第二系統の河湟花儿は、回族がおもな担い手であり、臨夏回族自治区を中心として、回族の分布の広がりとともに寧夏回族自治区南部や遠く新疆ウイグル自治区の昌吉回族自治区にまで及んでいる。

このように、一口に花儿といっても、歌われる地域によって細かく分類されていて、それぞれ歌詞の詩型、演唱形態、さらに音楽的特性が異なっている。とりわけ、曲調によって異なる名称を持ち、それぞれ〈何々令〉と称されている。たとえば地名を付けた〈河州令〉〈門源令〉、民族名を付けた〈土族令〉〈撒拉令〉、また花の名を付けた〈白牡丹令〉〈金盞花儿令〉、あるいはそのほかの名を付けた〈大眼睛令〉や〈尕馬儿令〉などである。それぞれの令には、大体同じメロディーのアウトラインがひとつあるが、実際に歌われるときは、その上さらに演唱者の個性も加わる。また、第二系統の河湟花儿の令は百種類以上もあることが知られているが、元蘭州大学教授柯楊氏によれば、代表的なものは〈河州大令〉〈河州三令〉〈尕馬儿令〉〈水紅花令〉〈白牡丹令〉〈哈唧唧令〉〈金盞花令〉などであるという。これに比べると第一系統の洮岷花儿の場合は単純で、北路の〈蓮花山令〉と、南路の〈扎刀令〉（阿欧令）の代表的な二つの令に尽きるのだという。

このほかの音楽的な特徴としては、使用する音階と音列に民族的な好みがある点である。サラール族の花兒は、常に mi、la、do、re、mi を基本的な音列とし、メロディーは比較的荘重であるが、回族・漢族の花兒は、多く re、sol、la、do、re、sol の音列の形式を採用している、格調は前者と比べて比較的明るく、さらにトゥー族の花兒は re、mi、sol、la、do、re、mi の音列を主とする、といった傾向が見られるという。

音楽的な特徴のほかに、系統間には定型詩としての歌詞にも違いがあるが、これについては本論の筆者がまだ不案内なので、今はふれないでおきたい。

最後に花兒の起源については、『中国大百科全書』では、今までずっと定説がないと断りながら、清朝の乾隆年間の臨洮籍の詩人吳鎮（1721～1792）の詩に「花兒饒比興、番女亦風流」⁽¹⁴⁾の詩句が見えることから、その起源は清朝以前、遅くとも明朝までは遡るだろうとする。そのほか、唐代あるいはさらに早くからあったと考える人もいるが、論拠はみな不十分である。

花兒の起源について柯楊教授は、花兒が生まれた地域の歴史的、地理的背景から考える必要があるとして次のように述べている。⁽¹⁵⁾

趙宗福著『花兒通論』に引用するように、明朝の文人高洪の「古鄯行吟」と題する詩編中に「……漫聞花兒断続長」とあり、高洪は、万暦年間（1573～1619）、河州（今の甘肅省臨夏）に赴任した役人だったことから、当時すでに花兒が盛んに歌われていたことが知れる。また、この歌謡が歌われている洮、岷、河、湟一帯、すなわち甘肅省の南部から青海省の西部にかけては、かつて中国王朝を脅かした異民族と境を接する地域であり、明朝では洪武年間（十四世紀後半、明初）から辺境防備のために多くの軍隊をこの地に駐屯させた。彼らは家族連れで移住し、ついにはそこへ定住するようになった。現在、この異民族の地に住む漢族の祖先たちである。また、同じく明朝初期、回族を募ってこの地の開墾にあたらせたことで、回族が漢族と雑居するようになり、さらに元末から明初にかけて新疆ウイグル自治区東部の哈密（ハミ）から青海省循化県東南一帯の撒拉族や回族が移住

してきた。東郷族、保安族がこの地に集まり住むようになったのも、同様に元末から明初にかけてである。こうして、チベット族⁽¹⁶⁾を含めた多くの少数民族がこの地で暮らすようになったが、彼らの村落は漢民族の居住地に散在し、しかも比較的漢民族の人口が多かったことから、他の民族も次第に漢語を話すようになり、漢語がこの地に雑居する民族の共通の言語となった。このような言語的基盤の上に、各民族が一緒に創作し歌うことのできる芸能、すなわち花兒が誕生したのである。ただし、第一系統の洮岷花兒と第二系統の河湟花兒との関係について言えば、洮岷花兒のほうが先にあって河湟花兒のほうはそのあとで成立したものでだろう、と。

以上が柯楊教授の説であるが、もちろん、花兒の母胎となったのが漢族の歌謡であったか、あるいはまた他の民族の歌謡であったかについては、依然として議論が残る問題である。

ところで、花兒は野外の労働の場でも歌われるが、まさにこの歌を歌うための年中行事がある。毎年、旧暦の四月から六月にかけて、各地の風光明媚な名山古刹など特定の聖域を会場として大がかりに挙行される花兒会である。『中国大百科全書』に大規模な音楽習俗だとあるように、場所によっては会期が六日も続く。著名なものとしては次のような会場がある。

- ①甘肅省康楽県の蓮花山 旧暦六月二日
～六日
- ②甘肅省和政県の松鳴岩 旧暦四月二十七日
～二十九日
- ③甘肅省岷県の二郎山 旧暦五月十四日
～十九日
- ④青海省民和県の峽門 旧暦五月五日
- ⑤青海省互助県五峰山 旧暦六月六日⁽¹⁷⁾
- ⑥青海省楽都県の曲壇寺 旧暦六月十四日
～十五日⁽¹⁸⁾

このうちの①③で歌われるのが洮岷花兒の系統、そのほかは河湟花兒の系統である。この他にも多くの会場があって、洮岷花兒系統の小会場については、柯楊教授が作成したリストによれば、現在一四九ヶ所を数える。開催期間も一月から九月までの各月にあり、各県の内訳は臨潭県五十六ヶ所、岷県三十二ヶ所、臨洮県二十七ヶ所、康楽県十一ヶ所、卓尼県九ヶ所、渭源

県八ヶ所、漳県一ヶ所などとなっている（規模が大きい蓮花山と二郎山、また物資交流大会での花儿会を除く）。

4 花儿と民間信仰

既述のように、『詩経』国風の恋愛歌を生んだ歌垣的な儀礼は、野外の聖地における雨乞いと男女の性的解放を要素としていたとされるが、甘肅省洮河流域の花儿会は、これときわめて類似した行事である。花儿という歌謡が、もともと神に捧げる歌だったことは、蓮花山の花儿会を見れば明らかだと柯楊教授は述べる。五、六日間にわたる蓮花山の花儿会では、男女の対唱が行なわれる前に、まず神に捧げる歌が歌われるという。これを「神花儿」という。もともとこの行事は、神花儿を歌うことが中心となっていたのだが、次第に男女の愛情を歌うことが多くなって、今ではあたかも男女が恋歌を歌い交わす行事のように見られているのだ、とも考えられている⁽¹⁹⁾。

青海省の西部、互助トゥー族（土族）自治県には次のような伝説がある。

丹麻花儿会は、互助トゥー族自治県の丹麻郷で旧暦六月十五日～十七日に開催される行事である。丹麻地区では、草花が美しく、樹木が鬱蒼と茂る六月の良い季節に、トゥー族の青年たちが集まって愛情のあふれる花儿を歌う。伝説によれば、ある土司がこの地で花儿を歌うことを禁じ、樹木を切り倒し、草花を取り除いたので、一面の砂れきになってしまった。その結果、三年間大干ばつに見舞われ、穀物がとれなくなった。悲しみ憤った青年たちが、我慢できずに花儿を再開すると、はからずもたちまち黒雲が空を覆い尽くし、どしゃ降りの雨が降って、草花や木々が蘇り、一面青々と茂った。花儿の歌声があったからこそ農作物も豊作になったのである。それ以降、ここでは毎年花儿会が開かれるようになった⁽²⁰⁾。

神花儿には、雨乞いのための「求雨歌」もある。次は柯楊教授が採録したその例歌である。

(A) 杆两根，一根杆，
十八位龙神保佑各乡都平安，
叫庄稼扯上十分田，
全县的百姓都喜欢。（临潭）

(B) 娘娘庙里木香呛，
先给天上玉皇唱，
轻风细雨落一场，
先把四路八乡的庄稼长，
斗价塌者三倍上，
坐者吃肉喝酒摊子上，
穷娘娘们一搭喧一场。（岷县）

標高が高く雨量全体が少ないのに、さらにその雨も順当には降ってくれない。そのような土地で暮らしてゆくための、農民たちの切実な願いが込められた歌である。この地方には低温被害もあって、さらに「散雹歌」（雹を除ける歌）といった歌もあるという⁽²¹⁾。

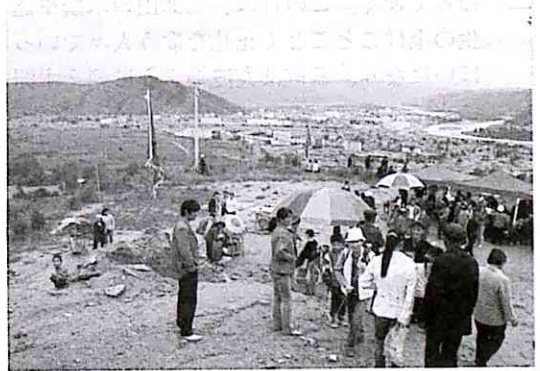


写真 A 教場村の神廟がある丘から望む岷県の町
右上が二郎山、左上が洮河
(2008.7.21筆者撮影)

上に引いた臨潭県の求雨歌 (A) にある「十八位竜神」とは、岷県の二郎山を中心とする竜神信仰の神々である。李璘編著『文史漫筆』（甘肅人民出版社、2001）所収「甘肅岷県民間的湫神崇拜」では、この神々の祭礼と花儿との関係を次のように述べている。

岷県各地には、十八ヶ所に湫神（池の神、水神そして竜神）の廟があり、人々の信仰を集めている。それらの神々は、旧暦五月になると神輿に乗って管轄地域の村々を巡行し、中旬には岷県市内の古刹に集合したのち二郎山に登って祭祀を受ける。これが旧暦五月十七日の有名な「湫神祭り」である。この地方ではそれぞれの湫神の巡行期間中に、各地で花儿を歌う風俗がある。五月の祭礼時における、花儿の会場は二十ヶ所以上にのぼる。その起源を推測するに、これは神への祈願と神を楽しませる活動とに関係があるだろう。大衆は花儿を歌って神靈に豊作を祈る。五月十七日の祭礼では、巡行する湫神の神輿を下ろして花儿を聞く風習がある。神が聞いて称赞する花儿が歌われている場所に至るごとに、神輿を上げて狂って跳ぶ動作をする。それはその花儿で祈願した内容を神が確かに受け容れたことを思わせるのである。次第に時間が経つにつれて、祭礼中の花儿の内容は世俗性を帯び、曲は全て民衆の心の声を歌うものとなってゆく。この日は、二郎山の木蔭や芝生の上はことごとく花儿を歌う人々でいっぱいになり、歌声は大波のように絶えず聞こえてくる。

次に、西北民族大学大学院博士課程に在籍して花儿研究を行なっている戚晓萍さんが近年採集した岷県西川区の湫神⁽²³⁾を祀る靈廟で歌われた神花儿を引用してみよう。

园子角儿种胡麻，
我给上天下个话，
秋风细雨连干下，
麦子长成棒槌大，
洋芋长成碌朱大，
大豆长成八个叉，
黄芪长得锄把大，
长得农民挖不下，
才说上天感应大。

時を問わずに降る雨は、この地に暮らす農民たちの切実な願いである。

また花儿会には、雨乞いのほかに子宝信仰もあった。子種を授かりたいと願う女性たちが歌う神花儿には、「求子歌」があるという。次は、⁽²⁴⁾蓮花山の花儿会で収録された求子歌の例である。

(A)

鋼四兩，量鋼哩，（鋼が四兩、鋼を量る）
儿子我要一双哩，（男の子が二人欲しい）
一个送者学堂里，（一人は学校へやって）
一个他把羊挡哩。（一人は牧童にしたい）
（挡羊：牧羊）——甘肅康楽に流伝

(B)

剪子要较葡萄呢，（ハサミで葡萄を切り取ろう）
灵佛爷，（仏様よ）
我儿子女子都要呢，（男の子も女の子も欲しい）
儿子披麻带孝呢，（男の子は親の喪に服す）
女子洗锅抹灶呢。（女の子は家事をする）
——甘肅康楽に流伝

この花儿を歌って涙ながらに祈っていた女性は、結婚後、長年子宝に恵まれなかった農婦だったとのことで、もしその後で彼女に子どもが生まれたら、きっと何年かに一度ずつ線香やお供え物を持ってお礼参りにやってくるだろうという。花儿会は、これらの信仰にもとづく行事である。

5 岷県馬燁命の花儿会（取材記）

(1) 洮岷花儿

花儿という歌謡は、歌われる地域によって分類され系統づけられていることはすでに紹介したが、筆者の関心からは、便宜上これをさらに〈即興歌〉と〈伝承歌〉に分類したい。この観点から見ると、第一系統の洮岷花儿は〈即興歌〉を、また第二系統の河湟花儿は〈伝承歌〉を特徴としている。歌詞と音楽性の面から見ると、曲調の多様性、すなわち豊かな音楽性を持っているのが河湟花儿で、これに対して、即興による歌詞の多様性を持っているのが洮岷花儿であると言える。それゆえ、音楽的な研究を志す研究者は河湟花儿に関心を示し、民俗学的あるいは文学的な研究を志す研究者は洮岷花儿⁽²⁵⁾に関心を示す傾向にある。河湟花儿は、曲調の多様性

だけでなく、洮岷花儿に比べてメロディーも美しく音楽性にもすぐれている。しかし、古代歌謡研究の面からいえば、洮岷花儿は実に興味深い歌である。

今回、花儿研究者として著名な、元蘭州大学教授柯楊氏の配慮によって、筆者は岷県の小さな花儿会を取材することができた。今年七月中旬、ほとんど花儿会の開催時期が過ぎたころであったが、西北民族大学大学院生の戚曉萍さんの多大な協力のもとに、限られた時間で貴重な取材をすることができた。

甘肅省の花儿会について、日本ではほとんど具体的な紹介がなされてこなかった。わずかに、山之内正彦「中国の歌垣」(『日本文学』5-8、1956)、あるいは大木康「甘肅“花儿”学術検討会に参加して 一生きていた歌垣と宝巻」(『東方』57号、1985)が概況的な報告をし、注意を促している程度である。しかも、それらはいずれも洮岷花儿を採り上げてはいるものの、北路すなわち蓮花山の事例のみである。筆者のわずかなこの報告によっても、花儿がいかにか貴重な歌謡文化であるかを知ることができると思う。

(2) 取材地

自動車で蘭州市から臨洮まで高速道路、それから一般道の国道212号線で、会川鎮、殫虎橋郷、梅川鎮へと進み、岷県に到着した。途中、各所で道路工事中の為、所要時間は六時間半であった。甘南地方は四川省に近いが、二〇〇八年五月に発生した大地震の影響はまったく無かった。蘭州への帰路は殫虎橋郷から右に折れて陝西を経由し、定西市へ出て、そこから高速道路に乗った。

蘭州市から南下して甘南方面に行くほど標高は高くなるが、次第に緑が増す。蘭州市周辺の山々は赤茶けた不毛の土地である。河湟花儿が歌われる臨夏回族自治州も乾燥した山岳地帯が多く、自然条件は岷県よりも厳しい。岷県もやはり山岳地帯が多いが、河の兩岸にある耕作地のほか、山の斜面には麦類や玉蜀黍、馬鈴薯、菜種があちこちに栽培されている。七月下旬ではあったが黄色い菜の花が一面に咲いているところもあった。また、現金収入のための薬草栽培も盛んらしく、沿道には薬草畑が広がってい

る。洮河は大きな川で、茶色に濁っていた。

岷県の、中心となる花儿会は旧暦五月十四～十九日にかけて行なわれる二郎山のものだが、その前後の月に小規模な花儿会が各地で盛んに催されている。その場合、開催費用の調達が必要で、現在ではおもに篤志家が費用を提供して開催しているらしい。まったく宗教的な施設とは関係のない場所が選ばれて開催される例もあり、今回訪れた馬燁命(マーイエルン、馬燁牧場護林駅)もそうで、三～四年前から行なわれるようになった新しい会場とのことであった。岷県からは車で、西河(千経川)という小さな川に沿って未舗装の村の道路を通り、さらに狭い農道を通って一時間程度山地に入った場所である。周辺にチベット族を始めとする村々が散在し、比較的広い草原が広がっているところで、放牧地でもあったが、神廟のような建物はなかった。なおまた会場とはいえ、スピーカで歌が流れたり舞台などの施設があることもなかった。最近、仮設舞台を設営してマイクを手にした歌巧者たちが喉を競い合う花儿会が各地で盛んなようであるが、旅程の厳しいなかで自発型の素朴な花儿の対唱に会えたことは幸いであった。

筆者が訪れたのは七月二十日の午後だったが、前後三日間にわたって開催されているとのことだった。時期的に、ほとんどあてにしてはいなかったが、ここで末尾に掲載した資料のような花儿の対唱を取材することができた。⁽²⁷⁾



写真B 岷県秦許郷馬燁命の花儿会会場風景
(2008.7.20筆者撮影)

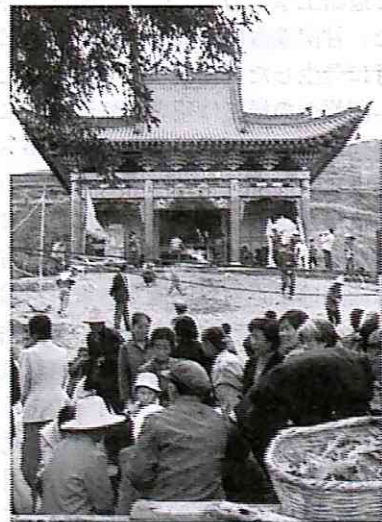
(3) 花児会参加者

馬焯命での取材の翌日、岷県の町から遠くない(壺藏河東岸)教場村の神廟が建っている丘へ登ってみた。ここには五穀豊穡を祈る廟が建っていて、その縁日らしく、爆竹が鳴らされ、老若男女が参詣していた。ただし、この日は初日らしく、花児を歌う人々のごく少数だった。初日は(あるいは翌日も)廟前で神に献げる老女たちの花児が歌われる。男女が恋歌を掛け合う花児会はそのあとの楽しみである。日程の都合上、この地の花児を取材することができずに帰路を急いだのは残念なことであったが、初日の廟前でも男女の花児を歌う人々が二組ほどいた。しかし、ビデオを向けられた女性は歌うことを固く拒んだ。ビデオには絶対に撮られたくないから、もう歌わないと言ってきかない。とくに若い女性はビデオや写真に撮られることを極端に嫌がる。一度カメラを向けたあとでは、録音だけでもいいからとお願いしたが、結局歌うのをやめてしまった。もしも自分の映像が家族に知れたら困るというのである。もっとも、筆者が撮影した花児の歌詞を確認してもらった夫婦によれば、夫婦で花児会へ出かけて別々の場所で対唱を楽しむこともあるのだという。

花児会には、未婚の者たちは参加しない。とくに未婚の女性は絶対に参加しない。花児会で歌う対歌は男女の愛情の歌であるから、公衆の面前で見知らぬ男性とそんな掛け合いをしたら、ふしだらな女として誰も結婚してくれないからだという。よって一般に花児会の参加者は既婚者たちである。縁日のにぎやかさにひかれ、子連れでやってくる人々も多い。このように未婚者の参加は禁忌になっているらしいが、花児にはもう一つの禁忌があって、既述のように家庭や村落内では歌うことができないという⁽²⁸⁾。花児は野外や花児会でのみ歌うことができる歌である。既婚の者たちの対唱であるから日常生活からみれば不倫とも言えるだろう。このような歌を歌う場面の撮影を絶対に許さなかった女性たちの心情は、日常の側面からも確認できる。花児を愛好する女性たちも、日常生活の中ではそのことを決して表に出さないようにしているという⁽²⁹⁾。

既婚男女の間で恋歌対唱が許される花児会は、

言うまでもなく万葉集・巻九に「…娘子壮士の行き集ひ かがふかがひに 人妻に 我も交らむ 我が妻に 人も言問へ この山を うしはく神の 昔より 禁めぬわざぞ…」(1759番)と歌われた古代ヤマトの筑波山における歌垣に酷似する。ただし、花児会が過去において性の解放まで伴っていたかどうかは不明というしかない。現在の参加者はすべて花児という歌そのものの愛好者たちである。かなりの歌巧者たちもいるようだし、さらに注目すべき点は聞き上手たちの存在である。最近では携帯電話の普及が著しく、おそらくはその録音機能を使っているのであろう、演唱者を囲んで多くの人々が熱心にその歌を録音している⁽³⁰⁾。対唱する花児は、そのとき一度だけ即興的に創られる作品であり、演唱者たちを取り囲む人々は、気の利いた歌詞があったら聞き逃すまいと、熱心に耳を傾けている。会場にいたある若い男性に、今日の掛け合いでは何か気の利いた歌詞が歌えたか、と聞いてみた。彼が言うには、「夜も床の上に座って、枕を抱きながら、あなたのことを想い続け、私はなかなか寝付かれない」といった意味の歌詞を歌ったとのことであった。彼は、この句をこの日の花児会での自分の傑作と考えていた。大勢の聴衆にマイクを向けられることは、歌唱者たちにとって名誉なことで、歌にますます力が入るのである。



写真C 教場村の神廟(祭神は女神)
(2008.7.21筆者撮影)

花儿は遠くの山まで届くような甲高い声で歌う歌だから、演唱者の姿が物蔭で見えなくとも、歌声だけは林の中からはっきりと聞こえてくる。人々はその声のする場所へ録音機能が付いた携帯電話などをもって集まってくる。

ようやく現地に着いたのが夕方、人々が帰り始めたころ、筆者は林の中で歌う一組の演唱者たちに出会うことができた。男性一人に対して女性たち三人が代わる代わる対唱する。もちろん女性たちは名前を明かしたくないと言って教えてくれなかったが、ビデオの撮影を許してくれたことは幸いであった。四人とも漢族とのこと。⁽³¹⁾ 男性の申平雲さんは、筆者の取材にたいへん好意的だった。

対唱している男性たちも、実は相手の女性がどこの誰かまったく知らないし、名前を聞こうともしないのである。女性たちは親しい者同士のようなだったが、対唱する相手はお互いにそれぞれの素性を知らない。花儿会における恋歌はそのような一過性の関係のうえに成り立っている。彼らは歌の掛け合いの妙そのものを楽しんでいるのであり、とにかく花儿を歌うことが大好きで、男たちなどはバイクで一、二時間かかる村からもやって来る。

(4) 歌巧者—花儿把式—

洮岷花儿は、男女が一对一对に掛け合うことはしない。いわば集团的恋歌で、男一人に対して女が二、三人、あるいは女一人に対して男が二、三人という形をとる。馬燁倫の花儿会で歌った申平雲さんに、筆者が滞在している岷県の町へ来て明日もう一度歌ってくれるよう頼んだところ、花儿は男女取り合わせて三人以上でなければ歌えないので、自分の友人とその妻も一緒に連れて来ると約束してくれた。残念ながら実現はしなかったが、洮岷花儿の演唱形態を知ることができた話である。⁽³²⁾

一人で複数を手相にしなければならぬ人は当然歌巧者であることが要請される。すべてはその場の即興によって作詞するため、かなりの素養が求められるからである。演唱者は聴くに堪える歌詞を創り出さなければならない。この地の人々は花儿にたいへん深い関心を持っていて、演唱者を取り巻きながらかなり批評的な気持で聞いているようである。今回、撮影したビ

デオを地元の人に見せたところ、「ここは本来こう歌うべきだ」という批評が随所に出てきた。これはきわめて興味深いことである。

歌い手たちはすべて即興詩人で、会場に来て具体的な相手と向かい合ってはじめて詩句が生まれる。会場に来る前にその日歌うべき歌詞を練ったりはしないという。馬燁倫で筆者がビデオカメラを向けた歌い手の申平雲さんは、さっそくそのことを歌詞にして歌い上げた。記録した歌詞の前に、「ここによそからのお客さんが来てくれて、歌えば歌うほど気持ちが良く、とても嬉しい」といった意味の歌詞も歌っている。地元の人々の評価では、彼はそれほどの歌巧者ではないとのことだったが――。

6 取材歌詞小考

この対唱では数秒の間を置いてすぐ返歌しているが、歌い出しに、日本の民謡で言えばハーハーに当たるような「エーエー」といった発声を入れるから、歌詞を考える時間的な余裕が多少生じる。また女性側三人は、次に誰が歌うかという問題があり、返歌に多少の間が生じている。今回取材した事例では、女性①が積極的に返歌し、この人がリーダーとなってあとの二人を対唱の場に引き出している。この組は必ずしも歌巧者たちではないようだが、むしろ自然な状態での対歌の例として資料的な価値は充分あると考える。つまり、花儿会に集まって歌う多くの男女がこれくらいの掛け合いはできるといふことの証左でもあるからである。

歌詞の始めの「鎌刀割了细叶麻」(1男)や「场里大麻长成柳」(5女①)といった部分は、歌の内容とは無関係に置かれる古くからの伝承的な句である。これは和歌の枕詞とも序とも違って、以下に続く詩句の韻を決める形式的な作用をするのだという。

麻 ma→沙 shā (1男)

柳 liū→斗 dòu、走 zōu (5女①)

今回の取材歌詞では、各句の音数(字数)は、次のようになっている。

表1 (全三十四首中)

	七字	八字	九字	十字以上	計	七字句の割合
男	14	6	6	6	32句	43.7%
女	37	9	6		52句	71.1%
(計)						(66.7%)
女①	26	7	6			(71.4%)
女②	5	2				(100%)
女③	6					
計	51句	15句	12句	6句	84句	60.7%

最も多い字数は七字で、女性たちにこの傾向が強く、女③は七字句のみである。ここから七字を基本とすることが知れるが、中には十四字に及ぶ句(22男)もある。

また、一首の句数は次のようになっている。

表2 (全三十四首中)

	1句	2句	3句	4句	5句	計
男	1	11	3			15首
女	1	7	8	2	1	19首
女①	(0)	(4)	(6)	(2)	(1)	
女②		(2)	(1)			
女③	(1)	(1)	(1)			
計	2首	18首	11首	2首	1首	34首

最も多い句数は二句で、次が三句。一句だけになっているのは途中で放棄した句であって、無視して良いと思われる。このときの演唱者が何句を基本と考えていたかは不明であり、演唱実例の一つとして報告するにとどめて置きたい。

柯楊氏によれば、漢民族の民歌(山歌)の基本的な歌体は、陝北の信天游のように二句からなるものもあるが、一般に四句七字の形式であり、これを「四句頭山歌」と称するという⁽³⁴⁾。ただし地域的な特色があって、甘肅省の康楽・臨潭・岷県一帯の洮岷花儿の歌体は三句構成が基本となっているともいう。岷県で取材した今回の花儿は、一句を七音とするある程度の規範意識は見られるが、句数は二句が多かった。これについては、かなり自由に一首を構成していると言うべきか、あるいは必ずしも歌巧者でないからと言うべきか、今後の調査検討が必要であろう。

7 終わりに

花儿を歌うときには、片頬から耳の部分に片手を当てる独特の歌唱ポーズをとる。また花儿は、野外で声を遠くに飛ばすように甲高い発声で歌う男女情愛の歌である。さらに同一地域に住む異なる民族がそれぞれの民族言語を超えて漢語という共通語によってお互いに演唱できる歌でもある。歌詞は方言の漢語であるが、演唱者には文字が読めない人も多いらしい。つまり、基本的には口承文芸なのである。古代ヤマトの歌垣、古代中国の『詩経』国風における民衆の恋歌、中国南部少数民族の対歌、そして西北の花儿、これらの存在は、かつて東アジアの広範な無文字社会にあった男女の対唱歌謡を想定させはしないだろうか。

中国の漢民族は一面文字社会でもあるが、それでも文字と無縁な辺境地域の民衆の間では対唱する歌の文化が残っていた。古代中原における無文字社会の漢民族もそうした歌謡文化を持っていたことは今日の『詩経』研究に見られるとおりである。これらを単純に遙かな古代の歌謡のなごりとするには無理があるが、無文字社会において、厳しい自然環境の中に生きる民衆が、生への願いを込めた儀礼を創り出すとき、おのずから共通した形をとったものと考えられる。その点で、必ずしも照葉樹林文化の特色ではない。甘肅省の花儿会はそうしたことの傍証とすることができるのではないだろうか。

【注】

- (1) 二〇〇七年四月、広西チワン族自治区の龍脊地区での筆者聞き取り調査による。
- (2) グラネー著『支那古代の祭礼と歌謡』内田智雄訳、弘文堂書房、1938、181頁
- (3) 白川静『詩経』中公新書、1970
- (4) 白川静、同上、79頁
- (5) 金田純一郎「唱和方式の婚俗をめぐって(下)「東門攷」」1958
- (6) 土橋寛著『古代歌謡と儀礼の研究』岩波書店、1965
- (7) 渡辺昭吾著『歌垣の民俗学的研究』白帝社、1967、1頁。渡辺は同書で「歌垣の齋場」ともいっている。

- (8) 内田るり子「照葉樹林文化圏における歌垣と歌掛け」、『文学』1984.12
- (9) 佐々木高明『照葉樹林文化の道—ブータン・雲南から日本へ—』NHK ブックス、1982、190頁
- (10) 以下、『中国大百科全書』音楽・舞踏編（台湾・錦繡出版、1993）に載る喬建中執筆「hua'er 花儿」の項を参考にした。
- (11) 柯楊著『中国民俗文化叢書・民間歌謡』（中国社会出版社発行、2008、27～28頁）によれば、漢民族の間では男女の愛情に関する歌はすべて「山歌」と称され、信天游・花儿・爬山歌・吳歌などは、山歌の地方的名称だという。また、これら色恋の歌は良俗を乱すものとして家庭や村落内あるいは日常で人々がよく集まる場所では歌うことが許されないが、田野・山林や河川・湖などにおける労働の場所では、なんら制限を受けず、声高らかに歌うことができる。山歌の名称はそんなところに由来しているという。
- (12) 同『中国民俗文化叢書・民間歌謡』、115頁
- (13) 臨洮、地図参照。
- (14) 「番女」は漢族からみた異民族の女性を意味するから、花儿の中に異民族の女の風流が歌われていると見れば、その歌「花儿」は当時から異民族によっても歌われていたことになる。
- (15) 柯楊「花儿溯源」（柯楊著『詩与歌的狂歡節—“花儿”与“花儿会”之民俗学研究』甘肅人民出版社2002、初出—『蘭州大学学报』（社会科学版）第2期1981 …この文献では明代を思わせる花儿の伝統歌詞や花儿の語義についても詳しく述べている。
- (16) チベット族はもとからこの地の住人であり、土族も民族的にはその系統である。
- (17) この日は大通県の老爺山でも花儿会が盛大に行なわれる。（武宇林著『「花儿」の研究』信山社、2005、400頁～参照）
- (18) 楽都県の瞿曇寺でもこの時期に行なわれているようである。なお、上記の日程は今日多少ずれている場合がある。
- (19) 蓮花山の花儿会を筆者はまだ調査していないが、今回訪れた岷県の町の近くの神廟で行なわれた花儿会の初日に廟前の広場で老女たちが「神花儿」を歌っている場面を見た。蓮花山では花儿会の一、二日目は「神花儿」を歌い、男女の対唱はその後だという。
- (20) 古代の『詩経』国風における恋愛歌の発生に関してもそのように捉える説がある。
- (21) 勝暁天著『青海花儿話青海』（香港銀河出版社、2002）
- (22) 柯楊著『詩与歌的狂歡節—“花儿”与“花儿会”之民俗学研究』甘肅人民出版社2002、39頁
- (23) 戚曉萍「岷南路花儿现状调查报告—以坎鋪塔为中心」、『西北民族研究』2008年第1期
- (24) 前掲『中国民族文化叢書・民間歌謡』、78～81頁
- (25) 二〇〇八年七月一九日、蘭州市にて柯楊教授の話。
- (26) 大木康氏はその後、明代の資料、馮夢龍『山歌』を採り上げた文献研究を行なっている。また近年、河湟花儿流行の地でもある寧夏回族自治区から留学生として来日した経験がある武宇林氏が『「花儿」の研究』（前掲、2005）と題した日本語研究書を出版している。これによって初めて我々は花儿の詳しい知識を得ることができるようになったが、この拙論に紹介したような男女対唱の具体的な在り方については残念ながら記載が乏しい。なお中国の研究文献を集めたものとして、櫻井龍彦『「花儿」研究資料目録（1925年～2000年）』（名古屋大學中國語學文學論集、13号、2000.12）がある。
- (27) 花儿会には季節祭の側面があるから、一般には旧暦四～六月に開催されることが多いが、現在行なわれている花儿会の会場としては、季節外れに鎮（村里）の「物資交流会」などもある。
- (28) 注（11）参照。なお、前掲『中国大百科全書』音楽・舞踏編では次のように述べている。花儿とその他の民謡（小調）では、歌われる場に厳格な区分があって、

花儿は室内あるいは村内で歌うことができない。だから「野曲」と称されるのである。それ以外に、世代の異なる者や血縁関係者とはお互いに対唱することができない。

- (29) 前掲、戚晓萍「岷南路花儿现状调查报告——以坎铺塔为中心」参照。
- (30) 蓮花山で取材した歌詞中に「……我把錄音机提上、把心愛的花儿都録上」（私はテープ・レコーダーを携えて行って、心から好きになった花儿をすべて録音する）なる詩句も見える（柯楊著『詩と歌的狂歡節——「花儿」与「花儿会」之民俗学研究』2006、7頁）。
- (31) 花儿対歌の言語は漢語の方言を使用する。今回の取材は漢族同士の対唱であったが、岷県の町には回教寺院モスクがあって回族も住んでいるし、すぐ近くの山手にはチベット族の居住する村もあって、花儿

会にはそれらの民族も参加するが、対唱する場合は漢語を使用する。河湟花儿を歌ってくれた岷県の張順喜さんに聞いたところ、回族と漢族の節は同じだが、チベット族の人と対唱したときは彼らの節が少し違っていたという。しかし、漢語を共通語として異なる民族同士が対唱するのが花儿の大きな特徴といえる。

- (32) その夜はかなり雨が降った。翌日、バイクで村を出た彼らから途中で道路事情が悪いために引き返さざるを得ない旨の電話があった。
- (33) 歌に巧みな人を「花儿把式」とか「唱把式」などと称する（柯楊著『詩と歌的狂歡節——“花儿”与“花儿会”之民俗学研究』甘肅人民出版社2002等）。
- (34) 前掲『中国民族文化叢書・民間歌謡』、111頁
- (35) 同書、113頁

〔資料〕 洮岷花儿取材歌詞（翻字原文と日本語訳）

凡 例

- (1) 取材日：2008年7月20日午後（曇天）
- (2) 取材地：甘肅省岷県秦許郷馬燁命
- (4) 対唱者：男性一人に対して女性三人。三人の女性のうち①が積極的に歌っていて、他の②③は彼女に促されて歌っている。四人の年齢は確認していないが、三十代から四十代の人たちと思われる。
- (3) 協力者：柯 楊（元蘭州大学教授）
戚 曉萍（西北民族大学大学院博士課程在籍）
張 鑫（西安外国語大学東方言語文化学院教員）
申 平雲（岷県馬燁命で出会った男性の歌手、年齢未詳、四十代か）
李 金光（取材歌詞の確認、文字がある程度読める、三十四歳）
劉 瑞巧（取材歌詞の確認、李金光の妻、文字は読めない、三十六歳）
- (3) 文字化の過程：取材の翌日（7月21日）、ビデオカメラにおさめた映像を現地の人に見せながら、当地で花儿のフィールドワークを行なっている戚曉萍さんに文字化してもらった。歌詞は中国語で歌われているが、方言があるので現地の人でないと中国人でも歌詞がよく分からないからである。日本語への翻訳は張鑫さんのお世話になった。
- (5) 衬句（襯句）：歌詞の前の（朋友们）（我的人）などは花儿を歌うときに慣用的に付けられる呼びかけの語で「衬句」という。
- (6) 歌詞整理：実際の歌唱上は句意に無関係な字音が多くあるが、ここには詩句として意味のある文字のみ記載した。



写真D 花儿会での対唱

（①～③の女性たちが右の男性と対唱している）

（2008.7.20 筆者撮影）

(原文)	(日本語訳)
1 男 镰刀割了细叶麻 外宾口拍去我心上沙 ⁽¹⁾	1男 鎌で細叶麻を刈り取る よそのお客さんが私の映像を撮ってくれて私は嬉しい
2 女① 六月十八花儿会 ⁽²⁾ 我们就合 bu 鸽站两队 ⁽³⁾	2女① 陰曆六月十八日の花児会で 私たちは鳩のように二つのグループにわかれている
3 女② (朋友们) 柏木盖盖盖酒缸 説下连你有指望 把我擦着干坝上 ⁽⁴⁾	3女② (友だちよ) 柏の木の蓋で酒甕にふたをする あなたと付き合うことを望んでいるのに 私を畑の畔の上に立たせたままだ
4 男 为啥我来你没来 我今几个骑个摩托者把心灰	4男 私はやって来たのに、あなたはなぜ来なかったのか 今日はおートバイに乗ってやって来たのだけれどもす ごくがっかりした
5 女① 场里大麻长成柳 截成轱辘做成斗 苍蝇把住斗沿儿走	5女① 脱穀広場の大麻はすでに柳になった その木を伐って車輪にしたり柁にしたりした 蠅はその柁の廻りを飛び廻っているよ
6 女③ (我的人) 镰刀割了细叶麻	6女③ (私の人よ) 鎌で細叶麻を刈り取る
7 女① 把你如比细叶茶 称上一两手星拿 一解渴来二解乏 三解我的心上沙	7女① あなたは細叶茶のようです そのお茶を一両量って一杯呑めば 一つには渴きを癒し、二つには疲れが取れる 三つ目には私の恋心を抑える
8 男 (娃阿姨) 四解我的嗑睡心上沙	8男 (おばさん) 四つ目は眠気をとるから嬉しい
9 女② (娃爸爸) 天爷不下阳着呢 我寒气淹着心着呢 ⁽⁵⁾	9女② (お父さん) 天の神様は雨を降らせないので曇っている 私の心は湿っていてあれこれ考えている
10男 (娃阿姨) 天爷不下晚晴了 我今日出了院门了	10男 (おばさん) 天の神様は雨を降らせないので今晚は 晴れるでしょう／私は今日出かけます
11女① 马燁仑的花儿滩呢	11女① 馬燁侖の花児会に

12男	带话叫你出山呢 腊肉凉粉都酸了 把那佛爷馍馍都干了 ⁽⁶⁾	あなたが山から出て来るように伝言を頼みました 燻製肉と涼粉はすっかり腐ってしまいました 神様へお供えした饅頭はすっかり乾燥してしまいました
13女②	马燁仑的石墙子 你带话就叫我来呢 (我的人) 天下老鸦沟沟飞 大会场上我挑一个	馬燁侖の石墻子 あなたの伝言を受けて私は来ることにしました (私の人よ) 世の中のカラスは谷を飛んで行く 私は花児会の会場で気に入った相手を選ぶと思う
14男	沙木解成一页板 这么多人你挑着捡	沙木を伐って一枚の板を作った たくさんの人がいますから好き勝手に選びなさい
15女①	斧头剁了李树材 我端端看下你一个 长得好看嘴又乖 (说话还到理上来) ⁽⁷⁾	斧で李の木を伐った 私にとってはあなただけです あなたはハンサムで話し上手だ (あなたの言うことは理にかなっている)
16男	象牙筷子夹粉呢 你说日子我等呢	16男 象牙の箸で麺を挟む 会う日をあなたが決めて下さい、私はいつでもいいよ
17女①	原打回是原来 象牙筷子夹粉呢 你说日子我等呢 日子略在十一营 ⁽⁸⁾ 大南门上把你行 ⁽⁹⁾	17女① 私はあなたの歌ったことを繰り返しましょう (※以下二行、16男に同じ。) 会う日は十一營の市の日にしましょう 大南門のところであなたを捜します
18男	镰刀割了绿芹菜 小南门上行你你没在	18男 鎌で緑の芹菜を刈り取る 小南門のところであなたを捜したが居なかった
19女①	二郎山的山根呢 我想你心肺肝疼呢 就合赖朵儿翻身呢 ⁽¹⁰⁾	19女② 二郎山の山の麓 心臓も肺臓も肝臓もみな痛くなるほどあなたのことを思 っている／ヒキガエルのように寝返りを打っている
20男	(娃阿姨) 斧头剁了水白杨 阿么你唱着我没唱 ⁽¹¹⁾	20男 (おばさん) 斧で水白楊を伐った／どうしてあなたは 歌っているけれども私は歌っていないのか
21女①		21女①

	你唱我也唱着呢 就合喊浪浪着呢 ⁽¹²⁾ 把死气一样胀着呢	あなたも歌っているし私も歌っているよ 私は牛追いのようにあなたに歌いかけている 腹立たしい気持ちでいっぱいです
22男	镰刀割了红叶材 ⁽¹³⁾ (娃阿姨)我今儿个专门跟上你的 脚印儿来 你脚印儿在么怜儿没在	22男 鎌で紅葉材を伐った (おばさん)私は今日わざわざあなたの足跡について やって来た 足跡は残っているけれどもあなたは居ない
23女①	我把脚印踏着泥后头 我把脚印丢下人没有	23女① 私は足跡を泥の中に残している 足跡は残っているけれども私はそこに居ない
24男	镰刀割了一根材 (娃阿姨)我到大河沟岔里把你行 ⁽¹⁴⁾	24男 鎌で薪を一本伐った (おばさん)私は大河溝岔へあなたを捜しに行く
25女①	空情拾下一盘盘儿 (还怕)把实心没拿一点点儿	25女① うわべだけの情けを盛った皿を幾皿も私に持ってくる あなたの本当の情けは少しも盛られていない
26男	斧头剁了桦材了 我给你全部把实心费上了 看你还对上对不上	26男 斧で白樺の木を伐った 私はあなたにあらゆる誠意を示しました 私の歌にあなたは答えてくれますか
27女①	斧头剁了香杆了 拉的人多你没有 这会把你两耽了	27女① 斧で香杆を伐った 私と付き合う人は多いけれどもその中にあなたは居ない／これでは二人にとって損です
28男	我先前拉怜儿有指望 (娃阿姨)你把哥哥晾着干埂上 我先前有你着可有指望	28男 私は以前あなたと付き合うことを望んでいた (おばさん)あなたは兄の私を畑の畔の上に放っておいた／あなたと付き合うことを楽しみに生きてきたのに
29女①	我拿实心把你哄 你拿空心把我哄 哄得那嗑睡来又丢盹	29女① 私は誠意をもって付き合っているのに あなたは口先だけで私を弄んでいる あなたの巧みな言葉にまるめ込まれて私はうとうとと眠 くなった
30男	(娃阿姨)麻绳扎了条帚了 叫你把我哄着半路上	30男 (おばさん)麻の縄で帚を作った あなたに弄ばれて中途半端な状態になってしまった

31女③

屋里家穷没靠头
把我引上逃难走
把难逃着两河口

32男

河里杨柳夹线柳
你跟上哥哥逃难走

33女①

月亮出来筛子大
那是你哄我的话

34女③

枇杷开花四瓣红
摩托骑上耍了人⁽¹⁵⁾

31女③

家は貧しくて誰にも頼れない
私を連れて駆け落ちしてください
私を連れて両河口へ逃げてください

32男

川端の楊柳と夾線柳
兄の私と一緒に逃げましょう

33女①

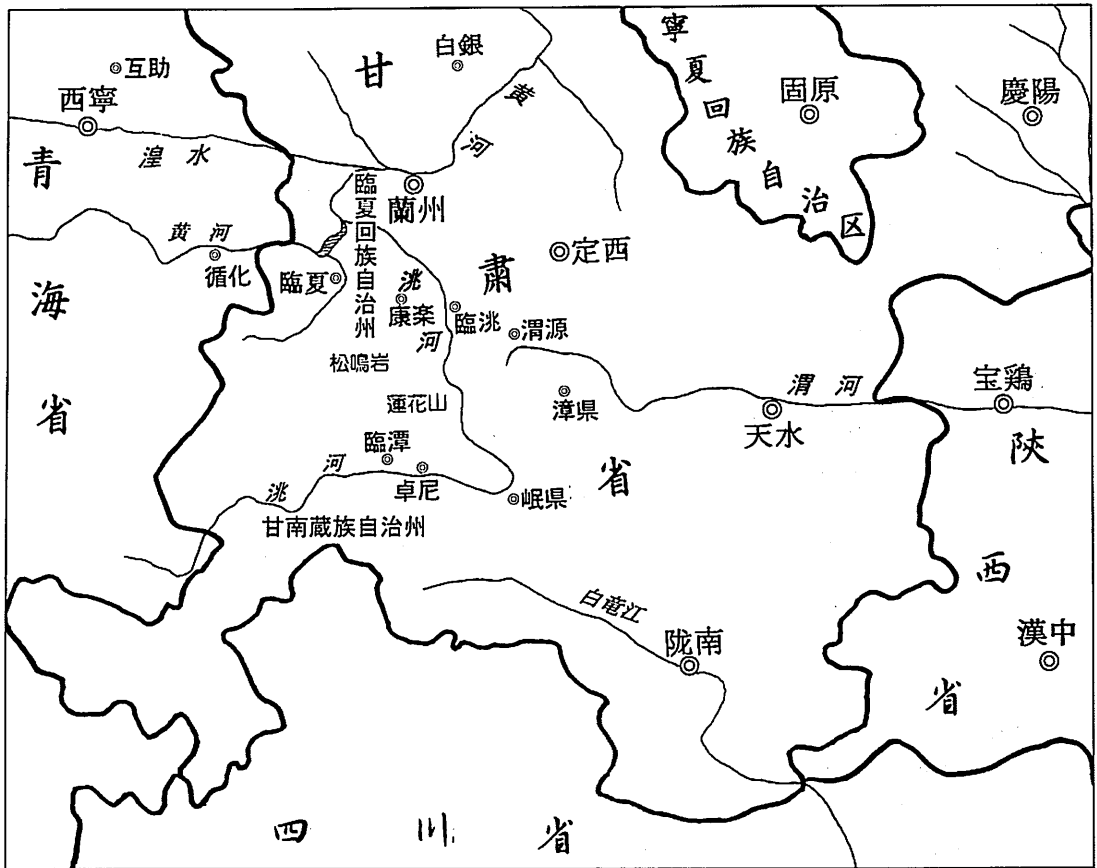
篩のような丸い月が出た
そんな話は嘘でしょう

34女③

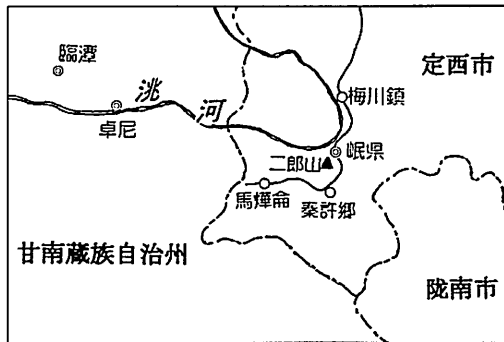
枇杷の花は赤い四つの花びらを開く
オートバイに乗っている恰好いいあなたに騙された

〔注〕

- (1) …三字目の一字不明。
- (2) 取材日7月20日は、旧暦6月18日に当たる。
- (3) bu…漢字不明。なお、ここで女①が次の女②を引っ張り出して無理矢理に歌わせている。
- (4) 干埂…田辺不長草の高台。
- (5) 「寒气」は「瞌睡」とあるべきところだと地元の人には批評する。
- (6) 「佛爷」は「白面」とあるべきところだと地元の人には批評する。
- (7) 说话还到理上来…この句があるべきところだと地元の人には批評する。
- (8) 十一营…岷阳鎮。
- (9) 行…尋找。
- (10) 赖朵儿…指賴蛤蟆（方言）。
- (11) 阿么…为什么。
- (12) 喊浪浪…喊牛的一種声音。
- (13) 红叶材…柳樹的一種。
- (14) 大河沟岔…指处地方。
- (15) 男たちの交通手段としてバイクが普及している。



中国甘肃省南部略図



甘肃省南部岷県付近略図